

アイコイル実験+1

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

ここでは、前回の続きとして、
アイ起電力の存在を示す、確かな証拠の1つを紹介する。
一般に、“アイ起電力”を発生させる目的で作られたコイルを、
アイコイルと呼んでいる。

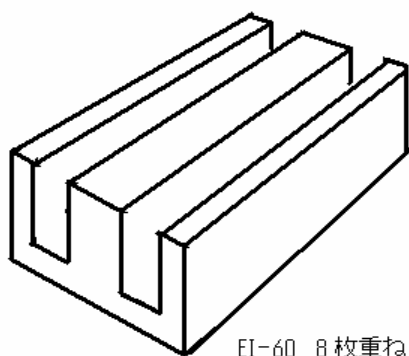
（アイ起電力の詳細は → [アイコイル超発電.pdf](#)）

アイ起電力はフリーエネルギー源になる。

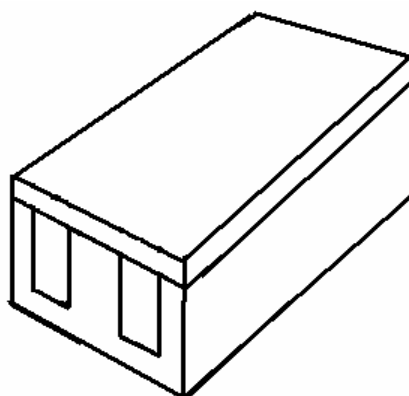
§1 アイコイル1



EI-60 コア



EI-60 8枚重ね



EI-60 コアを8枚重ねて、内にできるトンネル状の穴に、巻き線をはめ込む。
下の写真は、その例。



このコイルは、SW コイルとアイコイルの2つからなる。
SW コイルは30回巻き、アイコイルは約150回巻き。
2つとも、上の EI-60 コア8枚重ねに、はめ込む。

アイコイルの巻き線は、次の被覆線

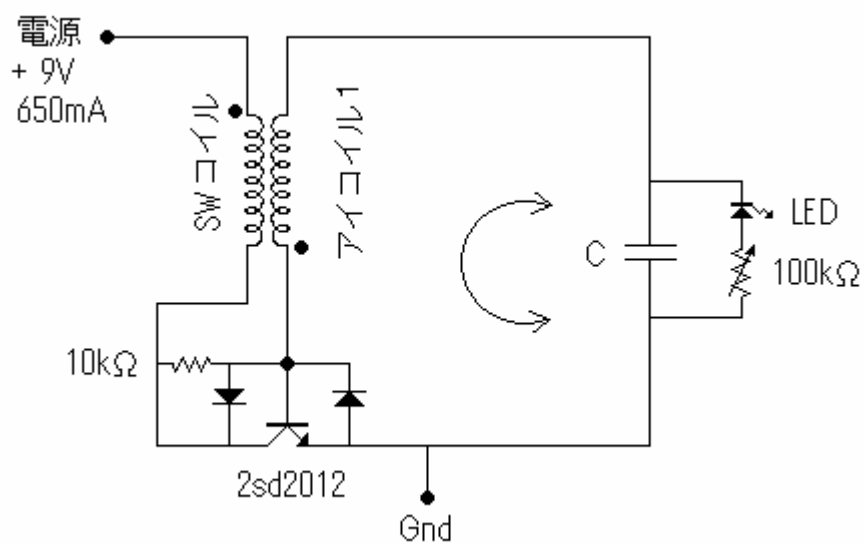
…協和ハーモネット:架橋ポリエチレン電線 KQE 0.5mm
(銅線 0.5mmΦ、外径 1mmΦ)

皮膜の薄いポリウレタン線などでは、

アイコイルの巻き線間に発生するアイ起電力によって、

絶縁破壊を起こし、短絡する可能性があるので不適當。
SW コイルは、巻き数が少ないので、
皮膜の薄いポリウレタン線などでもよい。

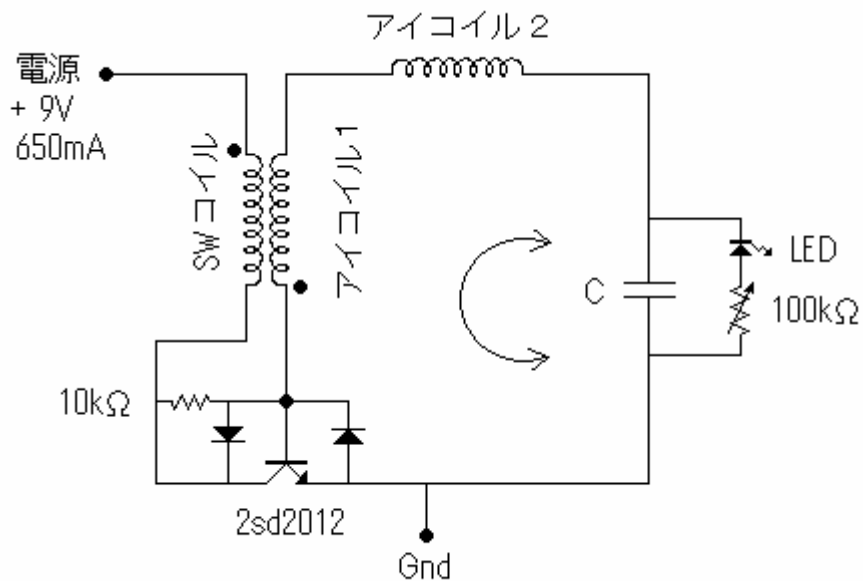
§2 実験1



前回と同じ回路に、このアイコイル1を組み込み、
 コンデンサ C を色々取り替えて発振させ、
 C の両端の周波数と交流電圧(AC-V)を、マルチメーターで測ると、

C=100pF → 85kHz 、 30V
 1000pF → 50kHz 、 45V
 4700pF → 23kHz 、 60V
 0.1 μF → 3kHz 、 50V
 1 μF → 880Hz 、 34V
 10 μF → 130Hz 、 7V

§3 実験2

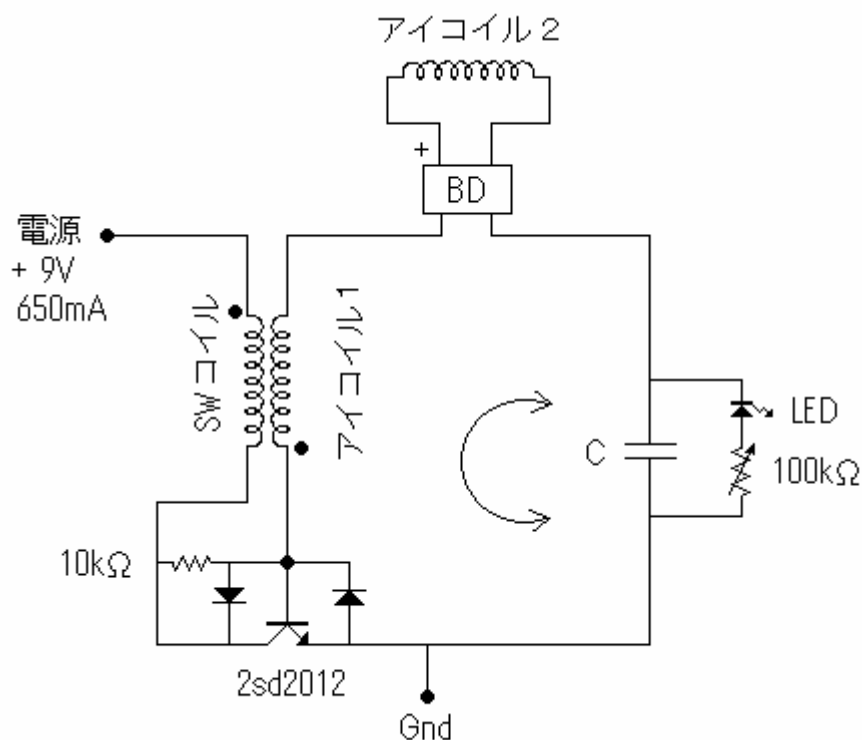


別途、アイコイル1と同じ要領で、アイコイル2を作る。
 ただし、こちらはSWコイルは必要ない。
 実験1の回路に上図のように、アイコイル2を組み込むと、

| | | | | |
|------------------|---|-------|---|------|
| $C=100\text{pF}$ | → | 35kHz | 、 | 50V |
| 1000pF | → | 16kHz | 、 | 100V |
| 4700pF | → | 9kHz | 、 | 210V |
| $0.1\mu\text{F}$ | → | 2kHz | 、 | 150V |
| $1\mu\text{F}$ | → | 550Hz | 、 | 65V |
| $10\mu\text{F}$ | → | 100Hz | 、 | 7V |

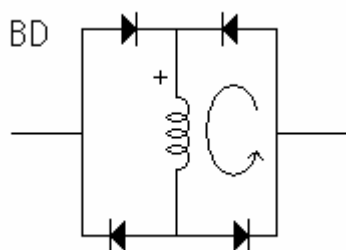
このように、途中にアイコイル2を入れると、CのAC電圧が大きくなる。
 普通ならば、余計なコイルが途中に入ったのだから、
 それが邪魔をして、AC電圧は下がるだろう。
 これは、アイコイル2が(アイ)起電力を発生しているからだ、
 と考えざるを得ない。

§4 実験3



上図のように、
アイコイル2を、ブリッジ・ダイオード(BD)の出力側に付け、
アイコイル2に、一方向にしか電流が流れないようにした。

こうすると、CのAC電圧は、実験1とほぼ同じになる。
では、アイコイル2のアイ起電力は、どこへ行ってしまったのだろうか？
実は、アイ起電力は、ブリッジ・ダイオードの中を、
グルグルと空回りしていて、外に出られないのである。



これもまた、アイ起電力存在のひとつの証拠になるだろう。



2020年7月発行

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2020年